

平成26年度第2回鳥取市政懇話会

日 時：平成27年3月25日（水）午後1時30分～3時

場 所：鳥取市役所本庁舎6階全員協議会室

出席者 【市政懇話会委員（15名）】

英義人委員、縫谷吉彦委員、松下稔彦委員、川上一郎委員、田中仁成委員、
村山洋一委員、田中道春委員、佐々木千代子委員、林由紀子委員、小谷文夫委員、
山口朝子委員、河原正彦委員、山脇彰子委員、松葉幸博委員、浅井真由委員

【鳥取市】

深沢義彦市長、羽場恭一副市長、河井登志夫総務部長、田中洋介企画推進部長、
下田敏美健康・子育て推進局長、竹氏正順経済観光部次長、井上寿光農林水産
部次長、尾室高志教育委員会事務局長、太田潤一企画調整課長

1 開会

2 市長あいさつ

第2回鳥取市政懇話会に御出席いただき、ありがとうございます。

御承知のように、今年は地方創生元年と言われており、現在、全国の地方自治体で人口ビジョンや地方版の総合戦略の策定の取り組みが始まっている。鳥取市も、昨年、賑わいのある「すごい！鳥取市」創生本部という名前の本部を立ち上げ、いろんな取り組みを進めている。

また、昨年11月には、若い層の職員による政策提案競争を実施し、今までの発想にとられない斬新な発想で提案を行ってもらった。この提案について、実現可能な部分について早速予算化し、これから進めていこうとしている。

本日は、前回の懇話会で頂いた御意見を反映させていただいた平成27年度の取り組みと、来年度策定を予定している総合戦略について説明をさせていただきたい。

本日、皆様方からいただいた御意見等を、今後の鳥取市政の参考にさせていただきたい。よろしくお願ひ申し上げます。

3 会長あいさつ

年度末のお忙しい時期にたくさんの方にお集まりいただき、ありがとうございます。

11月に続き、2回目の市政懇話会だが、前回同様大変大きなテーマとなっている。限られた時間ですが、それぞれ御専門の立場から、市政に反映できる前向きな御意見をいただきますようよろしくお願いいたします。

7 議事

「人口減少問題と地方創生について」

（1）事務局説明

（2）意見交換

○松葉委員 先回、保育料の軽減を言ったが、平成27年度予算を見ると保育児童第3子から無料にすることが出ていた。また、第2子から軽減されるということで、若い人たちにとって非常にありがたい。いい実現をしていただいた。

1月の市長や経済界の方の対談を読んだが、その中で、鳥取市は電子や機械といった製造業を中心にした中小企業が多いわけで、地場産業の育成が大きなポイントだと思う。やはり日本の技術というのは、中小企業の職人の技を創造されて新しい企業が生まれてきている。そういう点で言うと鳥取市の中小企業、農業、漁業、これらの産業を大きくしていただくということで、鳥大、それから鳥取環境大学と、鳥取市が連携をとって、若い方々の知識や知恵を鳥取市で活用していただくことに力を出していただきたい。やはり行政の力が必要ではないだろうかと思う。

先回は鳥取に住民票を持たずに大学に通われるという話も出たが、鳥取に定住、永住していただき、鳥取の企業に就職してもらって鳥取の発展のために力を出してやろうという若者を大いに育てていきたい。そのために行政も力を尽くしていただきたい。

同時に、鳥取市は高齢化が非常に進んでいる。この人たちが、医療と連携して早期発見、早期治療ということで、鳥取に住んでありがたいと、それで安心して子供を帰らせたいと、鳥取でも仕事もあるし事業もできると、そして安心して子育てもできるというふうに、行政としての力を発揮してもらったら。

もう一つ、本通り商店街にまちパルがあり、また鳥大地域学部の人たちが三角公園のところで、旧横田医院を利用していろいろやっておられる。環境大学の方々も本通りビルなどでいろいろやっておられるが、まちづくりの会とは全く連携がない。何とか連携したいなと思っており、行政の力が借りられないかと考えている。討議の材料にさせていただけたら。

○河原委員 前回は少し申し上げたと思うが、若者にいかに定住してもらおうか。特に鳥大は約1,000人、環境大学は約300人、毎年1,300人ぐらいの大学生が卒業していく。この2割が残れば300人弱が鳥取市に残ることになるので非常に大きい。我々が少し胸に手を当てて考えてみたときに、自分が就職とか住む場所をどうやって決めたかなということのを思い起こしてみなければいけない。家の都合で鳥取に帰らなければいけないというのもあったかもしれないし、何となくそこのまちが好きだ、ではここに住んでしまおうかというのがあると思う。おそらく仕事があるから残るとするのはその次ではないか。そこに愛着があってここで暮らそうかというのがあって、その上で産業、就職先が、量と質があれば言うことはないが、まず、ここで暮らしていこう、それでどんな勤めがあるのかというのが2番目に来るのだろうと思う。受け皿はしっかり、産業政策等いろいろ用意しなければいけないが、まずは愛着、よそから来た学生の何人かはこの鳥取に残ってもらう施策が必要。

それをこれからやっていかなければいけない。市役所にも大分汗をかいていただかなければいけないなと思っていたが、きょう、若手職員による政策提案競争というのを見ると、それに近いようなものが結構ある。公民館の職員にアルバイトで大学生を雇ってみようかと。そうすると地域に入っていくと、公民館の職員さんというのは、そこでいろんな方と触れ合う。こんなことを夏休みでもいいし、ふだんでもパートタイムであれば、こんなことを大学に来て話されると非常にいいかなと。例えばこうやって地域に、地縁関係とかなじみの人ができる、その場所が好きになる、こういうめぐり合わせをつくってもらいたいかなと。そういった意味では、例えば一番上のSNS鳥取PR大使任命とある。これも学生にやらせてジオパークを見させてどんどん発信させるとか、そんなことに使うと、行くことによってその地域になじんで、鳥取の自然が大好きになるから鳥取に居ようという子も出てくるかもしれない。

それから、今、中心市街地のお話があったが、環境大学もまちなかキャンパスになるべく学生が立ち寄るように学内で一生懸命やっていて、最近は暇なときはあそこへ来て自習したり勉強したり、それから打ち合わせに使ったりしてかなり使ってくれるようになったが、もっともっと中心市街地の地元の方と、あそこで触れ合うとその中で大人の方とも知り合いになって、ああ、ここで勤めてみようかとか、そんな感じになるような施策をどんどんつくっていただければいいかなと思う。

施策をつくるときに、ぜひ若手の人たちに、鳥大や環境大学に来ていただき、学生の話、

どうしたら飛びつくのかなというところを少しリサーチしてもらって制度設計をしていただくといいのかなと思う。

○英委員 それに絡めて、若者が地元にとどまるということも一つですし、もう一つは、一旦外に出て、UターンとかJターンも含めて、また戻ってきてもらうということをもう一つの大事なことだろうと思う。

そのときに、地域愛であったり郷土愛であったり、そういったものは小学校とか幼稚園のころの地域教育みたいなものだろうと思う。そこで本当に鳥取を好きになってもらうことによって、外に出てみてやっぱり鳥取がいいなというのは、特に低学年時代の教育であったり体験であったりというのが、それが結果として戻ってくる形になるだろうと思うので、そういった部分の地域教育というものをどんどん強くしていくことが大事だろうと思う。

もう一つ、ちょうどこの間、地元の金融機関さんから発表があったように、そうは言ってもやはり都会との所得格差というのは大きいので、初任給が低いから外に出ようかという学生も多いと思う。ですから、この間の銀行さんの一つの呼び水になりましたけれども、あれをもとに初任給というものはある程度上げていく。今度は中小企業ベースで、例えばですけれども、初任給アップのところに対して補助をすとか、いろんな新しい、それは多分、全国にないと思うが、そのぐらいの大胆なことがローカルにはあってもいいのではないか。

5年ほど前に商工会議所のほうから提案させていただいたことに、小規模事業に利子補給をするという制度があった。おかげさまで鳥取市では2年前から行っていただき、今、20件から50件に、2.5倍にふえた。これは後継者育成という意味でも、やっぱり小規模業者を育てていくことも非常に大事なことかなと思う。できれば利子補給をもっと強く打ち出していただくようなことがあってもおもしろいのではないか。経済の立場からすると、小規模の業者は利子が高くても仕方がないというのは当たり前かもしれないが、一般市民から見るとこれはおかしな話で、そういうところにこそ低く貸してあげなければいけない。これは行政にしかできない。金融事情で難しい部分があるので。ぜひ、そういうことももっと鳥取市版で強くお願いしたい。

○深澤市長 保育料の軽減について評価をいただき、ありがとうございます。できることからということで、今回は第2子、2番目のお子さんを従前の2分の1を4分の1に、それから3番目のお子さん以降は無料にという取り組みをさせていただいた。これが子育て支援等につながっていくことを我々も期待をしている。

また、地場産業等について、まさに鳥取市には今までに培われてこられたいろんな技術とかノウハウが蓄積されていると思う。人的な資源、そういった技術やスキルを持っておられる方もたくさんいらっしゃると思うので、そういったことを鳥取市の貴重な資源としてこれからも生かしていくことを念頭に置き、いろんな取り組みを進めていきたいと思っている。

ややもすると、企業誘致ばかりやっているように見える部分もあるが、そうではなくて地場産業、既存の地元の企業の皆さんに対する御支援等も我々は一生懸命やらせていただいているところ。担当部のほうにも、この後にもうちょっとPRしないといけないのではないかとやっているところ。

また、農林水産業、第1次産業は鳥取市の基幹産業と考えており、これからもこの第1次産業が立ち行くように、さらに将来もっと発展していくように、今まさに取り組んでいかなければならない。地方創生の取り組みとして、まず第1にそういったことに力を入れていきたいと思っている。

それから地元の大学との連携も産学官連携ということで従来からやってきているところ。先ほど河原委員さんからも御意見をいただいたが、鳥取大学、環境大学ともさらに連携を密にし、また我々も大学の持つておられる知見をいろいろ活用させていただき、いろんな課題に取り組んでいくことがこれからも一層重要になってくると考えている。

また、高齢化がこれから進んでいくわけだが、鳥取市、鳥取県はそういう意味では、全国的には先進的な地域であると思っている。2025年問題も盛んに話がされており、今の団

塊の世代の方が10年後に一斉に後期高齢者になられる。そのときに社会全体で介護や予防や医療、また暮らし等、住まいもあるかもしれない、そういったことをどうやって支えていくのか。今からそういった仕組みづくりを始めていかなければならない。来年度から第6次の介護保険事業計画、高齢者福祉計画をスタートさせていくが、この中に地域包括ケアシステムの構築を明記し、位置づけ、取り組んでいこうとしている。

高齢者の方が住みなれた地域でいつまでも心豊かにお過ごしいただける、そういった社会、そういった町でなければならぬと思いつけており、これからの超高齢化社会の到来を見据えて鳥取市が先駆けてそういった仕組みづくり、まちづくりを進めていく、今、まさにそういったときにあると考えている。また多くの皆さんと一緒にあってそういったまちづくりに全力で取り組んでいきたいと思っている。

また、大学とまちづくり協議会、地元の皆さんとの連携がいま一つではないかというお話があった。まちパル鳥取に環境大学が拠点を置かれたし、鳥取大学も昨年、街なかに拠点を設置されたところで、緒についたということで、これから地域の皆さんと大学とが大いに交流を深めて盛んにしていくということをもっと進めていかなければならないと思っている。

また、まずは働く場よりも地域に愛着が持てるかどうかといった趣旨のお話をいただいたが、若い方にいかに鳥取に定着していただくかということ考えた場合に、働く場がまず必要だと、子育てがしやすい環境づくりを整えていく、そういったことを考えたわけだが、いろいろ考えてみるとやはりその地域が好きだとか愛着が持てる、いいところだなと思えるまち、地域でなければ、やはり若い方がそこで暮らして活躍していくことにはならないのかなと思う。では、どうやってこれからそういうまちにしていけばいいのか、なかなか一朝一夕では難しいところがあるが、そういったことを念頭に置きながら鳥取のまちの魅力づくりを進めていきたいなと思っている。

また、大学に市の職員に来てもらって一緒にやったらどうかという提案をいただいた。

○河原委員 施策をつくるときに当事者、相手の人がどういう制度にすると喜んで、例えば公民館に行かせてくれとかですね。

○深澤市長 制度設計をしていくに当たって、デスクワークの中で物を考えるよりも、やはり現場に自ら出向いてやるということは大変重要な、大切なことだと思っている。職員提案等これからまたやっていただきたいと思っているが、もう少しフィールドワークも交えながら政策提案をやってみてはどうかと、お話を伺いながら思った。

また、これに関連して、所得が少し低いので初任給アップをしていかなないとなかなか地元で定着していただけないのではないかとということや、小規模な事業所、中小企業の皆さんに対する利子補給制度、こういったものをもう少し充実させていってはどうかという意見をいただいた。鳥取市としても無利子融資制度とかいろんな取り組みがあるが、今後、さらにそういった部分を充実させていかなければならないと思った。

○縫谷委員 最近、地方創生という言葉がすごく出ている。非常に未来が輝かしいようなイメージの言葉でいいなと思うが、その言葉に踊らされてはいけないなと思っている。今後、間違いなく人口は減るだろうし、その中で高齢者が増えていく、財政の問題が出てくる、その中でどうしていくのかというのは本当に深刻な問題ではあると思う。その中でしっかりやっていく、どうしていくかということが大事。

ただ、これに関しては鳥取市だけではなく、全国各地でやはり同じことが出てくると思う。多分、全国の地方自治体でいろんな取り組みをやって、モデルケースをやって、それを試していいものをとっていくということをしていかないと、多分、日本自体がよくなるのだからと思う。ぜひほかとは違う政策のあり方といったもの、鳥取市らしいものをしていただきたい。

2点目に、確かに働く場所をつくることも非常に大事だが、働く環境をよくすることも大事なのではないか。これだけ労働力が減ってくる中で、では、どこで補うかという、一つは女性だと思う。女の人がもっともっと社会進出しやすい環境が整ったら、労働力は極端にいうと1.5倍ぐらいになるのではないかなと思うので、それをどうつくっていく

かということ、ぜひ、やっていただきたい。

去年、津山のほうでコンビニを出した。主婦の方が働きにくるが、9時から15時までの社員というのを作った。そういう環境を作っていくだけでも働きやすい環境というのは出てくる。それに対して鳥取市として支援していくとか、そういう女性が働きやすい環境のまちなみみたいなことを作っていただくと、ほかとは違う魅力が出てくるのではないかと。

最後にもう1点、やはりこういった懇話会も性別や年齢層等、うまくミックスしていただいでやっていくともっといろんな意見が出て、話しやすい環境をつくれると思う。

○小谷委員 地域づくり、後継者あるいは定住というところで、鳥取市には人間国宝の前田さんなどがおられ、陶芸とか結構盛ん。たまたま2年ぐらい前、偶然、銀座三越でずっと眺めていたら、牛ノ戸焼とか、中井窯のお店というか、作品が出ていた。バイヤーさんが多分見つけられたのでしょうが。鳥取は意外とそういうところでのピンポイントのものはあるが、やっぱり陶芸家さんたちというのは後継者に悩んでおられるようだ。あるいは、情報発信をしたいけれどもなかなか忙しく手が回らないとか、どうやっていいかわからないところがあるというお話を聞いたことがある。

もう一つは、国の伝統工芸という制度があるが、認定してどうのこうのという制度ですが、非常にハードルが高くてなかなかそこにはかないので、例えば鳥取市版の工芸制度みたいなものをつくって、和紙とか陶芸とか、傘踊りの傘をつくる竹加工とか、そういった郷土ならではの工芸の伝承者、あるいはみんなでやろうよといった組み合わせみたいなものをつくるとか、あるいはそこで働いてみようという、要するに後継者づくりを促進するような非常にハードルの低い制度ができないか。それがひいてはその地域での定住の促進にもなるし、空き家対策にもつながっていくのではないかと。

もう一つ、その延長で、バンコクにある日本政府の観光客の方と情報交換をしたときに、御多分に漏れずゴールデンルートが多いが、今は信州とか北海道とか福岡に向いていると。タイから鳥取に来る人は、多分5回も6回も来ている人なのだろうけれども、確実に彼らは、ある程度したらもうちょっと生の日本らしい姿のところに来るようになるというお話を伺ってきた。これはタイに限らず、同じような東アジアの国でもそうだった。生の、昔の日本が残っているという山陰地方は最も典型的なところなので、そんなところに来る人、外国人を引き寄せようとすると、やはり昔からのよさを残しておかないといけない。あるいは芸能にしても、和紙とか工芸にしても昔から変わっていないものをずっと残していかないといけない。それも1人がずっとやるのではなくて、少しずつ規模をふやしながら、牛歩の歩みでいいので消えないようにやっていかないといけない。その辺が、文化芸術と商工経済とのちょうどエアポケットみたいなところに陥っていて、目が届いていないような感じがした。そういった鳥取市版工芸制度というか、定住も含めた、そんなものができるといいのかなと感じた。

○田中（仁）委員 先ほど文化芸術という観点からのお話があったので、私も同じようなお話をしようかと思っていたので、相乗りをさせていただければ。個人的な意見だが、地方創生という言葉自体、全然魅力を感じてなくて、同じようなことはこれまでやってきて、その結果今の現状なわけなので、わずか半年や1年そこらで短期的な成果を求められてもそんなにたやすいものではない。でも、せっかくなのでこれを機に、5年先、10年先ぐらいをしっかりと見据えて、ほかの地方にはない、競争することだけではないと思う。この鳥取の地で横並びではない、本当に地に足のついた取組を、すぐ成果は出なくてもやっぱり考えていく、いいきっかけにしたいなというところ。基本的には、この地で生活して暮らしていこうと思えば、この地でやっぱり利益を生み、この地で付加価値をつくっていくことが大切。

そのためには、雇用が大切だし、地域の魅力をアピールするには是が非でも雇用を確保することがまず大切。順番は個人的には違っても基本的には同じだと思うが、企業の側の責任が大きいので、これはなかなか行政にお願いする話ではない。我々民間企業がとにかく雇用の場を設けていくことが大切なことは重々承知の上だが。でも、この若手職員の話にあるように、やっぱり起業をしたいという学生さんが少しでもいればその可能性はない

のかどうなのか。あえて地域おこし協力隊のような不安定な仕事を求められるような、そういう価値観を持っていらっしゃる学生が全国にいらっしゃると思う。普通の就職、民間企業に就職するという雇用の場ではない、自分が何かをしたい、あるいはグループで何かをしたいという方が1人でも2人でもいらっしゃれば、本当にその人たちに手の届くだけの支援が、行政ができていくかどうかということがまず一つの課題だろうと思う。民間企業が採用をふやすというのはどうしても覚悟が要る。正社員で採用して長期で雇用すると、やっぱり1億ぐらいの投資だと思って採用するわけで、中小企業で新入社員を積極的に採用されようと思うところに何がしかの支援の輪というのはあってもいいのではないか。技術的なレベルよりも雇用をふやしていこうという企業に対して手を差し伸べるということもひとつ考えていただければ。

基本的にそれを前提にして、なお、鳥取の個性をどこに考えるかといったら、一つは文化芸術という部分での施策がちょっと希薄なのではないか。鳥取版の陶芸のプランというものもあるし、思い切って陶芸学校みたいなものをつくって、受け皿みたいなものをつくるとか、学校と言わずに塾みたいなものでもいいが、何か引きとめるだけの魅力のある場づくりというのをつくられてもおもしろいかなと思う。

それから、もう一つ、最近思うのが石浦の活躍に触発されたわけではないが、西中、城北高のあたりは相撲が結構定着している。わざわざ県外から城北に来るのではなく、西中に来られて、それで城北で相撲をとられる。これが本当に継続的に呼び込めるだけの魅力のある場、大相撲でなくても、スポーツとしての相撲でいい。教育という部分は県のほうの仕事になるのかもしれないがそういう部分で、でも住むのは市なわけで、市民が増えることになるわけなので、ここでもう一つ相撲という切り口を先々考えてみるのもおもしろいのではないか。

それから、若手の意見を取り入れて異次元の施策が出てきたが、どう見ても異次元ではない。普通の職場のコミュニケーションで十分拾い上げて出るべき意見でしょうから。でも、やっぱり若い人たちの意見を吸い上げたいと市長がおっしゃるのであれば、若い人たちに、町に出て同世代の人たちの、アルバイトやっている方たちとか、正社員ではない方たちとか、職がなくて困っている、そういう人たちとぜひ友達になる必要があると思う。積極的に町に出て生のリアルな声を拾い上げていただいて、その上で施策にぜひ反映をしていただきたい。

それからもう一つ。鳥取らしさという部分で、ここで地方創生を利用しようと思えば、自然エネルギーの導入がもうプランに入っていると思うが、太陽光発電だけではなくて、鳥取らしさを出そうと思えば、難しいとは思いますが、例えば廃棄物での発電とか、バイオマスでの発電ができないか。鳥取からお金が外に出る最大の要因はエネルギー。ほとんど石油化学エネルギーに頼っていれば、鳥取のお金は全部中国電力に吸い上げられてしまうわけですから。新しい、小水力でもいいし、鳥取らしい環境のよさをアピールするようなエネルギー施策というのも5年、10年というスパンでぜひ考えていただければありがたいと思う。

○松下委員 若手の提言とか、それをスピーディーに、予算も議決されて新年度から取り組むとか、よく目に見える。子育てに関する保育料の取り組みとかすばらしい取り組みをやっておられる。新たな取り組みといっても全国を見ると、ほとんどどこでもやっているということ。異次元のというか斬新なことをいろいろ考えてやろうとした場合に、従来と違うことをやるといういろんな御意見、御批判を、市民の方々からいろんな御意見をいただくようなことになる。

今、何で停滞しているかということを考えてときに、どうやってやるか。従来と同じような情報提供のやり方をしてもいけない。情報の出し方の工夫、いろんな意見を聞いたりして、やる必要があるのか、これはとても難しい問題だが、その辺を最近感じている。

これからますます新しい事業を、全国でやっていないようなことをやろうと思ったら、予算、議会でも説明が必要だと思うし、市民の方々に理解していただくというのは相当困難なことだと思うが、情報の出し方というのは工夫が要る。

それから、介護予防の分野が市町村に移されるということで、今、担当の方々がいろいろ考えておられるような状況。この介護予防というのは、従来、デイサービスの御利用については送迎がついていた。これで高齢者の方が予防のためにデイサービスに行きたいとか行けるという状況があったが、今は送迎が想定されていないと思っている。将来の介護を支えようと思ったら、予防というのは相当大事な分野になるので、高齢者の方々が予防のために出やすいような仕組みづくり、送迎も踏まえたような制度が鳥取市独自でできたらすばらしいと思う。

○英委員 婚活は、民間がするような形を応援するような形。いろんなパターンをつくれれば大いに結構ではないか。一つのおもしろい地方創生版としてはいいのではないか。バックアップするみたいな形で余り表に出ないでという形でできるのではないか。ただ、単に引っ込めるのも惜しいなと思うが。

○田中企画推進部長 おっしゃるとおり、当然地域からの希望が非常に強い。地域からの要望を受けて、婚活に取り組んでいるという状況。

先ほど情報の出し方という話もあったが、工夫をしながら民間を応援するとか、いろんな手だてを使いながら、この事業はもっと効率よく、効果が出るように頑張っていきたい。

○村山委員 県、鳥取市で創生のことはもう県も当然、国は国として協働なりあるいは協力していくべきではないかと思うが、その辺はどういう状態か、どういう考え方が聞きたい。

それと、鳥取の子供が東京や大阪に出て学費も生活費も使う、共稼ぎをしないと大学に行かせられないという状態。これからは大学は行きたいところへ行ける時代になると思うし、鳥取の子供を鳥取の大学に入れるということについて奨学金とかいろいろありましょいうが、あと防衛大学なんかは防衛関係に入るという約束で入るわけで、鳥取の子供は鳥取の行政なりあるいは会社に、定住したら優遇するというか、金銭、経済も含めて、それを行政のほうで考えてもらったら、その間、若者の地元の意見が反映できるわけで、一石二鳥、三鳥にもならないか。その辺をお願いしたい。

○林委員 先ほど陶芸家の方々の話で、後継者の問題が話されたが、実はわらべ館も郷土玩具をたくさん集めていて鳥取のあたりは郷土玩具がすごく多い。ただ、皆さんがとても後継者問題で悩んでおられて、去年の3月ごろに鳥取で長く郷土玩具をつくっていらっしやった方が、後継者がいないということで、突然、工房をやめられたということもあった。そういう後継者問題とあわせて起業家する人たちを応援して、郷土玩具も少しこれからはもつながらるようになればとても地域の魅力づくりにもなるし雇用対策にもなると思うので、ぜひ、こういう文化芸術関係の後継者支援みたいなものも考えていったら、一石二鳥というか一石三鳥ぐらいになるのではないか。

ただ、最初に鳥取への愛着の話があって、それに対して雇用のほうが先なのかという話があったが、鳥取への愛着を持つことはとても大事なことで、子供に持ってもらう前にまずは大人、地域の皆さんが鳥取に対する愛着がないと育ってくる子供も多分愛着を持ってないと思う。よくよそから来られたときに鳥取は何かありますかと言ったら、いや、何もありませんよという答えが出るという話が以前からあるが、鳥取はすごく恵まれていて暮らしやすいにもかかわらず、都会の人たちに対してちょっと引け目みたいなものがあるって何も言っていないけれども、本当はすごく暮らしやすく、都会はすごく給料が高くて生活費も高いので、トータルで見ると多分鳥取のほうが生活しやすい部分があると思う。そういったことも含めて親も子供もしっかりそういうことを学べるというか、実感できるようなことをしていく必要がある。

若手職員からの提案の中に、鳥取のいろんな情報を、学生、社会人サポート制度の導入ということで情報発信すると提案があるが、ぜひ、こういった形で鳥取のよさをもっと若い人たちに情報発信していくことは大事だと思う。継続検討の中に入っているゆるキャラ課の設置、この名称はどうかと思うが、大学生とか若い人たちに対してもっといろんな情報が提供できたり、若者がいろんな活動をするのを応援するようなところをもっと強化して行って若者定住につなげていくとか、一遍は鳥取を離れても、もう一回戻ってくる人

たちをもっと支援できるようなことをしていったほうがいいのではないか。ぜひ、こういう取組ももう少し研究して進めていっていただいたらどうか。子供たちが地域への愛着を持つよりも前に、まず地域とか大人たちが持たないとなかなか前に進まないのかなと思うので、ぜひ、そういう取組を進めていっていただいたら。

○尾室教育委員会事務局長 地元愛を育てる教育や、子供だけではなくて大人のほうもしっかりと鳥取が好きだと愛着を持つ、実感することが大切だというお話を伺った。まさしく教育委員会としてもそのとおりであると考えている。

鳥取市の教育ビジョン、目指す子供像が「ふるさとを思い志を持つ子」、これをビジョンに掲げて教育に当たっている。まさしく鳥取を愛し、そしてまたふるさとに愛着を持つ子供を育てる、そしてそのことはたとえ県外に出たとしても県外で鳥取のことを思いつつ、また、世界へ出たとしても世界から鳥取を応援すると、こういったことを念頭に置きながら教育に当たっているということで、まさしくこういったことで鳥取市の発展に寄与していただくような、そういった子供たちをたくさん育てていきたいと考えている。

○山口委員長 西中とか城北の相撲というくくりのライン、ほかにもそういうラインをつくるとか特色のある学校づくりというあたりはいかがか。

○尾室教育委員会事務局長 そのこの部分は先ほども言われましたとおりで、義務教育とかかわる部分で県の分野にもなるかもしれないが、このたび鳥取市教育委員会では従来の体育課、体育にかかわる部分を新たに生涯学習課と一緒にした生涯学習スポーツ課という形で、体育をスポーツという一般的な名称に改め、今後の2020年のオリンピック等を目指してさまざまな社会体育、まさしく市民全般のスポーツ、こういったものを振興していこうと考えており、先ほど御提言いただいた西中の相撲に関連した部分についても、そういったところを踏まえて検討させていただきたい。

○山口会長 先ほどの若者の起業について、どの程度起業ということについての応援とか、女性の社会進出、それから働く環境について等々の雇用問題、労働問題についていかがか。

○竹氏経済観光部次長 今、委員長から2点ほどお話があったが、ほかにも伝統工芸のことや自然エネルギーの活用の担当もしているので、それぞれお話をさせていただく。

まず、起業、創業の件について、本市ではこれまでも幾つか支援制度を設置しているが、今回の地方創生の交付金を活用し、27年度はさらに幾つか制度を設けて力を入れていこうと、さらに昨年6月に、国の産業競争力強化法に基づく事業認定を受けており、国の有利な支援もいただけるといったようなことで、その中では年間100件以上の起業という目標を課されているが、これまで以上に起業については力を入れていきたいと思っている。

それから、女性の活用と女性の登用という観点からはまさしくそのとおりで、今年初めでしたか、鳥取県でも商工関係の管理職がテレビに出まして、これからは女性の活躍というのが非常に大事だといったことをおっしゃっていた。女性の活躍に関する具体的な支援制度は現在のところないが、特によく言われるワーク・ライフ・バランスという観点、そういったことにも力を入れているので、これからどんどん女性の活躍の場、そういったことができるような取組をやってみたいと思う。

伝統工芸の継承については、本市には窯を初めとします陶芸、それから因州和紙、あるいは因幡の傘踊りの傘の作製とか、そういった地域伝統工芸というのがたくさんあり、その継承等に関しては、これも支援制度を設けており、制度を設けて10年くらいになるが、市外、県外から、人数は、これまでは修了された方が7名程度、現在研修に従事されている方が5名といったことで、それぞれ助成金を交付するなりという支援をする中で、本市の代表的な伝統工芸の継承に努めているところ。

自然エネルギーの活用については、平成23年度から本市ではスマート・グリッド・タウン構想といったものを策定し、自然エネルギーの活用の取組に力を入れている。25年度からは、総務省の自然エネルギーの活用の中で分散型エネルギーの活用といったことが提唱され、国の委託を受けて今年度マスタープランを策定した。これからは、平成28年度の電力の完全小売化を見据えたPPSという電気事業者、こういったものを27年度には鳥取市と民間とが出資して立ち上げるような形をとり、太陽光だけではなくバイオマスや廃棄物、

それから小水力、風力、そういったものから発電されるような電気を買って需要家に売っていくといった取組も今後進めてまいりたいと考えている。

○山口会長 先ほど福祉分野で予防が大切という話があったが、今度、介護支援が大きく変わるといって地域包括ケアについて市長からもお話があった。住みなれた町に長く住んでいただくために予防も大切だし、地域包括ケアの室もできたと聞いているので、鳥取市が新しいまちづくりに向けていただけると本当に期待度が高いところ。

その地域包括ケアのまちづくりが、もちろん住まいが重要。そして、これが高齢者福祉の視点だけではなく、この分野にぜひ子育ての視点も入れていただき、継続的な支援、妊娠・出産・子育てがぷつぷつと切れているような支援だが、これを地域包括ケアの枠組みの中で妊娠・出産、そして就学まで切れ目のない支援の形を、中学校区、小学校区の中に相談員なりを配置した形でしていただけたら。特に住まいについては地域包括ケアの中心になる大きなテーマである。

高齢者、空き家ということが出ていたが、高齢者のほうでは介護つきマンションということが今後考えられている。同じように子育てとしてこれだけ待機児童が出ている。保育つきマンション、放課後児童クラブつきマンションということがいい形での住まいというくくりで、新しい鳥取の施策として出していくことによって大きな影響力もあるのではないかな。ぜひ、地域包括ケア室は子育てのほうにも目を向けて、新しい施策を打ち出していただけたらありがたい。

○浅井委員 私自身も鳥取外から来た人間なので、何で鳥取に来たのかというと、高校の先生が鳥取環境大学をお勧めしてくださって、オープンキャンパスで来たときの大学の雰囲気すごく好きになったのでこの大学に来た。なので、鳥取に来た理由としては、行きたい大学が鳥取にあったから鳥取に来たということになる。

大学生活は、自ら外に出ようとしないと大学内の友人関係だけで生活ができてしまう状態。なので、地域とのつながりというのが大学生活の中に入り込んでいない部分があると思う。大学内だけで生活をしてしまうと、地域への愛着というよりはたくさんの友人がいる今の大学がある鳥取が好きということになってしまうので、就活を始めるに当たって鳥取にしようという考えよりはやはり友人の多い地元に戻ろうとか、もうどこでもつけるところにつこうかと思ってしまう学生が多いのではないかな。

先ほどからもあったが、大学生が地域の方々とのつながりを持つ、地縁ということがすごく大事かなと思っている。私自身、大学で学友会という学生の自治会の執行部でいろいろとかかわりを持っているが、大学のある津ノ井のまちづくり協議会の方から大学生と長く連携をとりたいというお話をいただいている。いろんなイベントを個人がぽつぽつとやることはあるが、大学との長い関係というのが今までなかったので、そういう面では長い関係というのを地域の方々や大学生が持てるように、大学生である私自身もそういう活動ができればいいかなと思う。

私自身は親の関係で転勤をしていたので、一つの地域に長くいたという経験がない。なので、地域の教育というよりは、自分でその町を知ろうという力というか、興味というものがその町を好きになる原動力になった。なので、大学の4年間の中でいかに学生に町に対する興味を持ってもらうかということが大事かなと思っている。

○田中（道）委員 まちづくりという立場で一言お話しさせていただきたい。まちづくり協議会は今から7年ぐらい前からか、宮下地区まちづくり協議会が発足したのが平成20年12月18日だったと思うが、丸6年経過して、今、7年目に入っている。6年も7年も経つと大体地域にも行き渡ってきた。それは鳥取市全体もそう。まちづくりという言葉ももう抵抗がない。初めは何だそれはという感じがしていたが、そういう時代は済んだ。私のまちづくりも外向きで研修会も2度ほど出たし、逆にこちらのまちにも島根とか広島とか山形のほうからも来られたし、お客さんをお迎えしてやっていることをお話した。そういう交流会みたいなことを当初、4～5年ぐらいはやっていたが、もうぱったりなくなった。裏返せば行き渡ってきているなど、大体、全国的にも、鳥取県にも。

私の町、国府町も5つ地区があるが、それぞれの地区は地域でそれぞれ特徴を生かした

まちづくりをやっている。それぞれに特徴があり悩みもある。働き手がない、支える人がない。高齢化はどんどん進んでまちづくりをする人がない。また、観光で売り出す素材がたくさんある。それをいかに知っていただく、来ていただくためには、どうして広めていくか、わかりやすくいえば売り出していくかということでしょうか。

具体的に大きな観光バスが2台来て、宇倍神社にお参りされ、池田墓地というルートだと思うが、あとは何にもない。この人たちをどうしたらとめられるだろうかと、とめるすべがない。そういうことを痛切に感じて、どこでもそうなのです。来ていただくけれどもとめる手段がない。これを何とかしなければいけないなど。国府町には年間何十万人も観光客がこられるが、御飯を食べるところさえない。そうかといって大食堂を開いてもそうそう1年間の好景気に湧くようなレストランの経営ができるわけでもない。こういったところで発想はするけれども具体策はないというのが、今、私たちのまちづくり協議会で悩んでいるところ。

そういったようなことも日夜考えながら、この地域が、鳥取市が元気になるだろうか、活気づくだろうかと考えているところ。この間石破大臣が来られ、鳥取県民、特に東部地区では煮えたら食わあとという、そういう気質ではいけないということで、何か知恵、工夫、そうしたものにはどんどんお金が出てくるけれども、前みたいな状況ではないですよというお話を聞いた。全くそのとおりで、これからは知恵比べ合戦かなということ、今考えている。

○佐々木委員 若者の起業について、鳥根県の江津がこの間地域づくり大賞か何かもらわれたところだが、そこは空き店舗に若者がお店を開いてどんどん増えていって、今もう空き店舗がない状態だとお聞きした。何でそんなふうになるかということ、ビジネスコンテストみたいなのをやって、こういうことをやりたいと提案して、そのコンテストで優勝した人にはお金もついて、事業の後のフォローも周りがやってということで、1年に1、2、3位ぐらいまではそれで出るそう。その人たちがちゃんとお店を開いていると。それに外れた人たちも、賞金は出ないけれども彼らの発表に対して賛同する人がいて応援する人ができるということを知ったので、そういうことができたらいいなと、考えていただきたい。

それから、日本のよさが鳥取にあるという話で、何年か前に明治大学の、今、学長をしていらっしゃる福宮先生が副学長の時代に鹿野にいらっしゃって、鹿野には日本の田舎の原点があると褒めていただきすごく心強く思った。次の年に留学生18人ぐらい、3泊4日で送り込んでくださった。私たちも日本の田舎の普通の生活を味わってもらおうというコンセプトでおもてなしをして帰っていただいた。その後が我々の協議会だけでは続かないので、こういう例もあるのでモニターがとれていると思うので、市も一緒になって留学生とか外国人の方をターゲットに、日本の田舎のよさをアピールして来ていただくというのはいいい手だと思う。

○川上委員 農業の問題で、今までのお話は、多分、縮図版みたいなことになるかもしれないが、実は決め手がなくて困っているということ。もともと農業問題は、1つには食糧供給という国家的な大きな使命という役割があるわけで、国の政策に期待して委ねる部分というのはかなり大きい。しかし、これももうからなければいけない。今回の農業改革、国のほうでは競争に勝つてもらうということを強く打ち出してきた。このことは反対ではないわけだが、現場のほうではなかなか浸透しないというところ。

具体的に申し上げますと、1つには地域単位で考えていかなければならないということ。地域の担い手に農地も集積して効率よくもうけると、これが1つの方法になる。しかし、裏側には農地を提供する人とそれを受けてもらう人と、この2つに分かれる。ところが本気で農業をやっている担い手の人に聞くと、一般の農家の人から白い目で見られるという、そういう発言が出てくる。なぜかと言うと、もうかればもうかるほど俺の農地を使って安く使ってもらっていると、こういう不満が出てくる。担い手の側から見れば、困っている農地を助けているのだと、こういう言い分があるわけで、ところが国の政策ではそれをどんどん進めるということですから離農促進のような形の制度も出てきて、そうなることと離農するのにお金をやりましょうというそういう制度もある。

ところが、10アールまでしか今度は自分をつくられないという制限があり、その10アールでつくったものは当然自給が普通だが、小遣い稼ぎに直売所に出したらどうかと言えば、それは相ならないと。離農の支給をもらった者は販売してはならないと。こういうふうにきめ細かくずっと入ってきますと現場のほうでは動きがとれない形になってくる。これを解決する方法は、結局は顔が見えて信頼がおける地域の中で、話し合いの中で納得することしか方法はない。そこに手を差し伸べていくという仕組みやそういうものが欠けてきておるといふこと。国の政策一本やりで入ってきますと、現場のほうはもう冷めてしまっているといふこと。

地域地域といっても、範囲の広い地域だったらこれはもう国の政策そのままを持っていくしかもう方法はないわけで、旧市町村単位で顔の見えるような小さい地域でそれを世話して話し合いのできるような環境づくりという、そういうところまで持っていかうとすると、人づくり、リーダーという部分にまたぶつかってくる。そういう面の政策をやはり地方自治体のところで手を入れていくしかないのかなといふことを感じる。

それから、ある程度儲けがあるなといふふうに夢と希望を持っている方々に言わせると、一般的に農業はきつい、汚い、危険だと、3Kの話が出てきて、それが前にどんどん出てくると、ますます悪循環で農業は魅力がないといふことを宣伝したようなことになる。自信のある人は、農業は儲かっているとってほしい。でない結婚にも結びつかないといふことで、いろんな問題が出てきて、さて、どうしたものかなと。結論はやっぱり一般の地権者であり、そこに住んで農地も守っているそういう方々の話し合いの場ができていくような、そういう政策といふか、そこに手を差し伸べていくような形のものでまず欲しいなといふことを感じている。

○井上農林水産部次長 これといふ処方箋ははっきり言って今のところ具体的でないのが現実。今、鳥取市としては、国の施策にのりながら担い手への農地の集積、それから集落営農組織の組織化、一番地域と密着するところ、特に新市域の中で中山間地域あたりは面積が小さいといふこととあわせて、区画が小さくてなおかつ段々田んぼといふか、のりのほうが平面よりも広いではないかといふ田んぼもあるといった状況の中では、なかなか生産して経済的にペイができるかといふとなかなか難しいところ、水稲だけでは。ですから、地域全体で農地を守っていく仕組みとして集落営農組織を組織化して取り組んでいただくといふのが一番地域にとっていいことではないか。

それともう一つ、水稲だけではなく野菜、現在、鳥取市は白ネギを栽培していただくように進めているが、それに加えてもう一つアスパラガスの生産振興を図ろうとしている。そういったものと水稲と加えてやっていくといふことで。集落全体でやる場合に極端に言うとう、プラマイ・ゼロであれば皆さんのところが、今まではどちらかといふと農業をするために外から稼いできてそれを投資していた。それがなくなるだけでも1軒の家としての経済としてはよくなるという部分もある。ただ、どうしても世話をする人にはそれに対する所得としてのある程度の金額を補償することが必要になるので、そういった換金できるような作物の栽培が必要になってくるかなと。

そういったことで、この話し合いの場だが、今の人・農地プランという、先ほど言いました農地を担い手に集積するといふことのための話し合いを各地域で行わせていただいている。なかなかマンパワーが足りないので全集落一度にするといふことにはならないが、順次進めていきたいと思っている。

○山脇委員 女性の活躍、女性の進出といふのは本当に今後の企業の生きるすべといふか、本当に上手に使えばもっともっといいやり方が見つかると思うが、ただ増やせばいいといふものではなくて、そこに何らかの研修なりできちんと教えてあげないと、マネジメント力をつけないといけないとか研修をきちんとさせなければならないと思う。ただ、管理職だけを増やす、では何のための管理職といふところをきちっと本人たちに自覚させなければいけない。

確かに鳥取市、鳥取県は女性の管理職は多い。それは県庁、市役所、あと準公務員が多いから増えているだけで、一般企業はほとんど片手、もう数%だと思ふ。もう少しそのあ

たりを行政の力でいろんな研修の機会をやっていただきたい。また、商工会議所とかJCもそれぞれ女性社員をどういうふうにして活かしていったらいいのかというのは一緒に考えていただければいいかなと思う。

それと、PRに関しては、女性の子育てというところも苦労している。若いママさんたちはどういうふうにして子供を育てていいのか、困ったときに誰に相談したらいいのかというところを、いろんな制度があるのにそれを知らないの、そういうことを一括して若いママさん用にパンフレットをつくるとか、こういうときにはここに何とかサポートデスクがあるよ、ここに1回連絡をしてごらんとか、そういうものが1つのものでわかるようにしてあげればいいのかかなと思う。

あと、先ほどから出ている文化芸能というところで、私も40年ぶりで鳥取に帰ってきて鳥取はいいところだと思う。情報のPRの仕方、今は少しよくなったし、この「すごい！鳥取市」を上手にもっともっと使って行って民芸だけではなく、玩具も、かすりとか織物とか和紙とかいろんなものがあると思うが、そういうものを廃校を使って工芸村にするとか。輪島なんかはやってらっしゃるが、そこに若い陶芸家が何人か、そうするとそこに家族が生まれる。その家族は鳥取の方と結婚し、そこでまた新しい家族ができるということもあるので、廃校を使うのか空き家を使うのかわからないが、そういうことも含めて外部に、県外の人にも発信していければいいのかなと思った。久しぶりで鳥取市のホームページを見て、そういうところは昔に比べてできていると思う。ただ一つ、Wi-Fiをもっと早くやってほしい。そうしないとこれがあっても、こういういろんな機械があっても、今はもうインターネットで通じないといけなから、この地域だったらできるけれども、この地域だったらできないところが鳥取にはまだいっぱいある。それではせっかくの機会が失われると思うので、予算をそこには必ずつけるみたいな感じで早急に拡大していただきたい。

○深澤市長 今日に限られた時間だったが、大変活発に意見、御提言等をいただいた。大変示唆に富むお話をいただいた。

今、地方創生と言われているが、奇をてらったようなことをやったり、注目を浴びたりマスコミに取り上げていただくようなことを、今、鳥取でやる必要はそんなにはないのかなと、まさに地に足がついた取り組みをしっかりと今やる、そういった時期にあるように思っている。鳥取市も平成18年から人口増加対策とか若者定住とか中山間地域の振興、これは平成22年からやっているし、いろんなことをやってきている。その延長上に国が今示している地方創生の取組があるのではないかなと思っている。

ただ御承知のように、今回は極点社会、東京に一極集中、そういったものを改善しないと、何とかしないとこの国はもたないのではないかなということ、今回は今までとは違うのではないかなと個人的に思っている。そういった地方創生の取組をこの鳥取から先駆けてやる、そういったときだと思ふ。これは鳥取にとってチャンスであり、今、皆さんのお話を伺い、やっぱり鳥取にはいろんなすばらしいもの、潜在的な力、ポテンシャル、そういったものがあると思っている。今こそそういったものをみんなでお互いにそのよさを認識し合って、それを生かして将来を見据えて進んでいくということではないかなと思っている。

来年度からは第6次の行革がスタートし、第6期の介護保険事業計画、高齢者福祉計画、また第4期の障害福祉計画、いろんな取り組みが5年のスパンとか9年、3年あるが、スタートする節目の年でもある。合併10年を経過してこれからさらに将来を見据えて力強く前進していく時期にあると思っている。

今日いただいた貴重な御意見、御提言、これから来年度の鳥取市の取組に生かしてまいりたい。引き続き御支援、お力添えを賜りますようお願い申し上げます、お礼の御挨拶にかえさせていただきます。

○山口会長 以上で、第2回鳥取市政懇話会を終了します。ありがとうございました。